

昭和^{戰前}傑作落語全集

昭和
戦前
傑作落語全集

第四卷

講談社

昭和戦前傑作落語全集 第四卷

定価 一六〇〇円

昭和五十七年二月二十日 第一刷発行

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一

郵便番号 一一二 振替 東京八一三九三〇

電話 東京(〇三)九四五 一一二(大代表)

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

◎講談社一九八二年

*落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えます。

昭和戦前傑作落語全集 第四卷 目次

嬉氣りんきの火の玉……………八代目桂 文 楽 5

猫……………柳家権太楼 15

慰安会……………三代目桂 米 丸 25

五郎助長屋……………(五代目古今亭今輔)柳家金語楼 35

間抜け泥……………五代目蝶花楼馬楽 47

笑い藁……………(林家彦六)柳家権太楼 58

留守居番……………三代目三遊亭金馬 68

宿屋の仇討……………七代目三笑亭可楽 84

娘義太夫……………三代目三遊亭金馬 101

出世次官……………九代目翁家さん馬 (九代目桂文治) 111

仏馬……………七代目三笑亭可楽 122

茶漬幽霊……………三代目三遊亭円馬 135

化け物づかい

七代目 三笑亭可楽 145

金語楼の後備兵

柳家金語楼 160

毛氈芝居もうせん

三代目 桂 米 丸 174

身代り杵きね

三代目 三遊亭金馬 183

胡椒の悔みこしょうくや

六代目 柳 亭 芝 楽 191

戸籍調べ

柳家金語楼 200

官営芸者

三代目 三遊亭金馬 214

松引き

六代目 柳 亭 芝 楽 224

道具屋

桂 小 文 治 244

強盗屋

七代目 金原亭馬生 258

武助馬

三代目 三遊亭小円朝 268

不精床

七代目 三笑亭可楽 279

皿屋敷

六代目 橘家円蔵 292

ずっこけ

五代目 三升家小勝 307
(六代目 三遊亭円生)

辻八卦

二代目 林家染丸 323

忘れ男

柳家権太楼 335

夜店風景

七代目 林家正蔵 345

首提灯

五代目 蝶花楼馬楽 356
(林家彦六)

お灸きゆう

七代目 金原亭馬生 367
(五代目 古今亭志ん生)

お弁当

柳家金語楼 374

親ごころ

三代目 桂米丸 388
(五代目 古今亭今輔)

解説

矢野誠一 402

装幀・及部克人

惔氣りんきの火の玉

八代目 桂 文 楽

「惔りんき氣は女の慎むところ」などという事を申します。といつて、あまり惔やかないのもいけません。」「乃公おれが、こんなに道楽をしているのに、家内が何ともいわないところを見ると、何か外ほかに出来てるんじゃないか」なんて、これは穩おたやかでございませぬ。ダカラ、嫉やいていけず、妬やかないでいけず、その中間をいかなければいけない、すなわちこれをりんき、応變と申します。あんまりあてにはなりません……。で、男には全然嫉妬やきもちはないかという、なか／＼そうでございませぬ。男の妬やき方は露骨でございます。

甲「オイ、ちょっと向うを見なよ、乙おつな女と角帽の学生と、あんなところで立話をしているぜ、癪しゃくに障さわるから水をぶっ掛けてやれ」

ひどいやつがあるもので、後で聞いて見たら、兄妹きょうたいで移転ひつこしの相談をしていたんだそうで、氣の

毒な話です。本妻と二号さんとは嫉^やき方が違うそうでございます。

妾「ねえ旦那」

旦那「何だい」

妾「貴郎^{あなた}妾^{わたし}に頭を貸して下さらない？」

旦那「私の頭^{わし}をどうするんだ」

妾「白髪^{しらか}が生えてるんですもの」

旦那「いいじゃアないか、白髪が生えてたって」

妾「そんな事をいわないで、ちょっと貸して下さいよ」

旦那「どうするんだよ」

妾「貴郎^{あなた}と二人で歩いてると、親子だなんて人が噂をするんで、口惜しいじゃアありませんか、ダカラ頭をお貸しなさいよ」

膝枕^{やきもち}というのにさせて白髪を抜く、大変な嫉妬^{やきもち}があるものでございます。私達は覚えがございませんけれども、これはなか／＼悪くないものだそうでございます。御本宅へお帰りになると、

妻「オヤ、貴郎^{あなた}、頭をどうなすったの、白髪がなくなったじゃアありませんか」

旦那「ナニネ、床屋で眠^おている内に、白髪を抜いてしまったんだよ」

妻「マア、何てえ床屋でしょう、失礼な。白髪がたくさんある程重々しくって信用が附くんでご

ございます。そんなに若々しく作って浮気でもさせようと思って。こっちへいらっしやい」

と、黒い毛を皆みな抜いてしまった。お妾さんの方で白髪を抜いて、御本宅の方で黒い毛を抜いてしまつて、とう／＼旦那を坊主にしちまつた。馬鹿々々しい訳わけでございますが、どうもこの三角関係というものは、うまい工合くあいにゆかないようでございます。

その昔、浅草花川戸はなかわとに橋屋さんという鼻緒問屋はなおとさんがございました。そこの旦那が堅人かたしんでございました。何一ツ道楽みちがくがございません。女などは内儀かみさんの外ほかは振り返つても見ません。ある時仲間の寄合よりあいがございまして、それが終ると、ちょうど日の暮れ方でございます。

○「どうだい、これから繰込くりこもうじゃアないか」

△「けっこうだね」

×「私わしも行くよ」

□「乃公おれも行くよ」

○「どうだい橋屋、お前もいっしょにおいでよ」

且「どこへ行きます」

○「廊なかへ繰り込もうというのだ」

且「吉原でございしますか、それはお断り申します。手前は家内が待っておりますから」

○「そりゃア内儀かみさんも待っているだろうが、たまにはいいじゃアないか、交際つきあいだからおいで

よ」

いやだというのに皆なで無理に引張って参りました。ところがこういう堅人が一度遊びの味を覚えると始末にいけないもので、二三日たちますと、今度は一人でコッソリと出掛けました。それが病附きになって、しげ／＼通う内に、そこは伶俐な方だから算盤を弾いて考えた。こんな事をしていると、身上を潰してしまふ、無駄な入費ばかり掛かるから、これはいっその事落籍をしてしまおう、と、それから親もとへ話をして、親もと身請けという事にいたし、根岸の里に手ごろの家があつたから、それを買つて、妾宅を構えました。見越しの松に船板塀、庭を広く取りまして、下女が一人に狎が一匹、たゞいまはテリヤなどを飼つておりますが、昔は狎に限つたもので、又御婦人が狎を抱えている姿はいいものでございます。もっとも狎というものは妙な顔をしておりますので、狎のために御婦人が引立つような訳で。どうかすると、「あの女が狎を産んだんじゃアねえか」なんて、そんな氣遣いはありません。とにかく旦那様は一晚おきにはその根岸の方へお泊りになる。お宅の方へこれが知れずに済む筈はございません。誰かお饒舌のやつが内儀さんに煽動たからたまりません。旦那様が御用達に行つたつもりか何かで、

旦那「今帰りました」

妻「オヤ、お帰んなさい」

旦那「何だい、変な顔をしているね、今帰りましたよ」

妻「ですからお帰んなさいと申しているじゃありませんか」

且「何だその言い草は、つつけんどんな言い方をして。あゝ草臥た」

妻「どうせお草臥れでございましょうよ、フーン」

且「オイ、変な事をいうなよ、お茶を入れておくれ」

妻「妾の入れたお茶では美味くないでしょう、フン」

且「何だ、そのフーンてな、おかしければアハ、と笑いなさい。オイ、飯を食うよ、膳を持つて来なさい」

妻「妾のお給仕では美味くないでしょう、フーン」

且「又始めやがった。巫山戯たやつだ、いい／＼、飯なんぞ食べない」

旦那も面白くないから、又プイと表へ飛出してしまふ。始めの内は月の内に二十日お帰りになつたのが、十日となり、遂には五日か六日しか御本宅へお帰りにならないような事になりました。サア御本妻は口惜しくつて／＼しようがない。根岸の女などが出来たればこそ、旦那様が家へお帰りにならない。怨めしいは根岸の女と、こうなると御婦人は恐いもので、藁の人形に五寸釘、祈り殺してやろうと、夜半に起きてコチン／＼釘を打ちます。誰も知るものはなからうと思ふと、悪い事は出来ないもので、何者かこれを見た者があつて、根岸のお妾に告げ口をする。もとより吉原にいたくらいの女、馬鹿にしているよ、妾が旦那を無理に呼んでる訳じゃアない、旦那

那の方から来るんじやアないか、自分の勤めぶりの悪いのを棚に上げて、人を怨むなんてあきれた人だ、先方で五寸釘を打つんなら、こっちでは六寸釘を打ってやると、コチン／＼と始めました。又それが御本宅の方へ知れると、先方が六寸釘ならこっちは七寸釘だと、コチン／＼、こっちでも負けまいと八寸釘でコチン／＼、それを聞くと内儀かみさんは一尺五寸釘を……そんな長い釘はありません。双方で負けず劣らずやっている内に、人を呪えば穴二ツ、内儀かみさんがふと煩わづらいいて、口惜しい／＼と言いつつ死んでしまふ。スルと恐ろしいもので、お妾も僅わずかの間に死んでしまいました。こうなるとつまらないのは旦那で、両方なくして茫然ぼんやりしております。

ところがこの橋屋の土蔵の間から、夜の丑三うしみつ頃になると、ポーッと青い火が一ツ燃え上がりまして、この火の玉が、フワ／＼フワ／＼根岸の方へ向って飛んで参ります。すると根岸の方から一ツの火の玉が、フワ／＼飛んで来て、ちょうど大音寺前のところでバツタリ出遇であって、火の玉と／＼狂いながら上になったり下になったりして争います。サアこれがたいそうな評判になります。夜更よふけてこの界限かいがいを通行するものはございせん。

旦那「番頭さん、ちょっと来ておくれ、お前火の玉の噂を聞いたかい」
番「へエ、昨晚湯屋でちょっと耳に入りました」

旦那「どうも困ったものだな、打ち捨てて置くと店の暖簾のれんにかゝわるが、何とかいい工夫はないものかね」

番「さようでございますな、何しろ対^{あいて}手が火の玉でございますから、困りますな。エーこうなすってはいかゞで。坊さんに頼みまして、有り難いお経を誦^よんで頂^{いた}いたら、成仏するだろうと思ひますが、いかゞでしょう」

且「それは良い思ひつきだ。お坊さんなら、お前も知つての通り、谷中の木蓮寺の住職は私^{わし}の伯父だから、これは伯父さんをお願いして見よう」

と、谷中へ参りまして、

且「実は伯父さんこれ／＼でございます。どうかお願いします」

僧「ア、よろしい、引受けた」

ところがお経などは受附けない。

僧「お早う」

番「これはお住持、どうぞお昇^{あか}り下さいまし……エーお住持がいらっしゃいました」

且「ア、伯父さん、どうぞこちらへ、いかゞございました」

僧「とてもだめだよ、何しろどうも大變な勢いで、有り難いお経も何も耳に入らない」

且「どうも困りましたな」

僧「私^{わし}の考えでは、こうしてはどうだろうと思う、今夜お前と私^{わし}と二人で行つて、両方の火の玉が来たら、お前がナンドリと慰めてやんなさい。そうして気の鎮^{しずま}つたところで有り難いお経を聞

かせたら成仏するだろうと思うが、どうだな」

且「なるほど、それなら大丈夫でございましょう。よろしく願います」

僧「じゃア私は一寝入りするから」

和尚さん昼寝をして、夜の御飯が済むと、それから碁を打ち始めました。そのうちに九ツの鐘がポーンと鳴りますと、番頭が、

番「エ、旦那様、たゞいま九ツの鐘が鳴りましてございます」

且「ア、そうかい、伯父さん、時刻が参ったそうで」

僧「では出掛けよう」

浅草田圃^{たんぼ}を急いで来た大音寺、

且「なか／＼淋しゅうございますな」

僧「夜^よが更^ふけているからな、それにこの辺は人殺しや、試し斬りのあるところだが、火の玉が出るというので、そういうものも出ないようだ……。オイ／＼何をしている」

且「煙草を喫^のもうと思ひますが、あいにく火道具を忘れて参りました。伯父さんお持ちじゃアございせんか」

僧「私は煙草を喫^のまんから、火道具などは持っておらん。マア、モウ少し辛抱^{しんぼう}しなさい」

八ツの鐘が、ポーンと鳴ると、根岸の方から、お妾の火の玉がフワ／＼フワ／＼飛んで参りま

した。

僧「オイ／＼見なさい、あれがお前のお手掛けさんの火の玉だ」

旦「ア、来ましたか……。オイ／＼、こゝだよ／＼」

と呼びますと、火の玉がスーッと来まして、頭の上を三遍クル／＼と廻って、ピタリ前へ止まりました。

旦「ア、驚いた、しかしマアよく来てくれた。お前の来るのを先刻から待っていたんだよ、こゝにおいでの方は、お前は知るまいが、私の伯父さんで、谷中の木蓮寺のお住持だ。種々お前に話があるんだが、ちょっとこっちへ寄っておくれ、一ぶくしたいから、お前の火を貸して貰うんだ……。ア、うまい。さてお前がこれほどまでに私を思ってくれるのは有り難いが、よく考えておくれ。あの私の家内というものは素人で、誠に分らずやで困る。幾らいつて聞かしても分らないで、とう／＼マアこんな事になっちまったんだが、お前はマア苦勞人だから話が分ってくれるだろうと思う。とにかく先方は本妻だから、お前の方で立ててやってくれたら、丸く納ると思うのだ。今彼女が来たらよくいつて聞かせるから、とにかく一ぶく附けさしておくれ」

話をしているところへ、花川戸の方から、御本妻の火の玉がブーンと唸りを生じて飛んで参りました。

旦「オイ／＼、こゝだよ／＼」

と知らせますと、頭の上を三遍クル／＼と廻ってピタリと前へ、

且「ア、気味が悪い、頭の上を三遍廻るのが礼儀かい。時にこゝにおいでの方はお前も知っての通り、私の伯父^{わし}さんで谷中木蓮寺のお住持だ。種々^{いろく}と心配を掛けたんだが、今度、この女^{ひと}にもよく話をしたところ、私が悪うございました、これからは内儀^{かみ}さんを姉^{ねえ}さんと思って仕え^{つか}ますといってくれたんだ。そこでどうかお前の方でも、妹^{いもうと}と思って可愛^{かわい}がってやっておくれ、私が頼^{たの}むから。マアお前ちょっとこっちへ寄って火を貸しておくれ、煙草^{きせろ}を喫^すいたいから」

と煙管^{きせろ}を持って行くと、火の玉がスーノと向うへ離れて、

「妾^{わたし}んじやアうまくないでしょう、フーン……」

〔講談倶楽部 昭和十一年一月号〕